あじなまち

2011.09.15
Vol.01
保存版

テーマ

「十七夜祭」考

復刊によせて

阿知須郷土史研究会
会長　河野 昌博

《♪ハーエーイヤ》《エイヤエイヤ♪》

阿知須名物『十七夜』の踊り曳き山の音頭が、阿知須浦の夏空を吹き抜けていきます。

今年の十七夜祭は、明神様（恵比須神社）の真新しい神殿の落慶を祝う待望の祭りです。歴史も旧く、由緒ある祭りですので、数多くの話題を阿知須や近隣の人々の暮らしの中に残してきています。大正・昭和と激動の時代の最中、庶民の苦難は続きましたが、それでも祭りは続けられました。

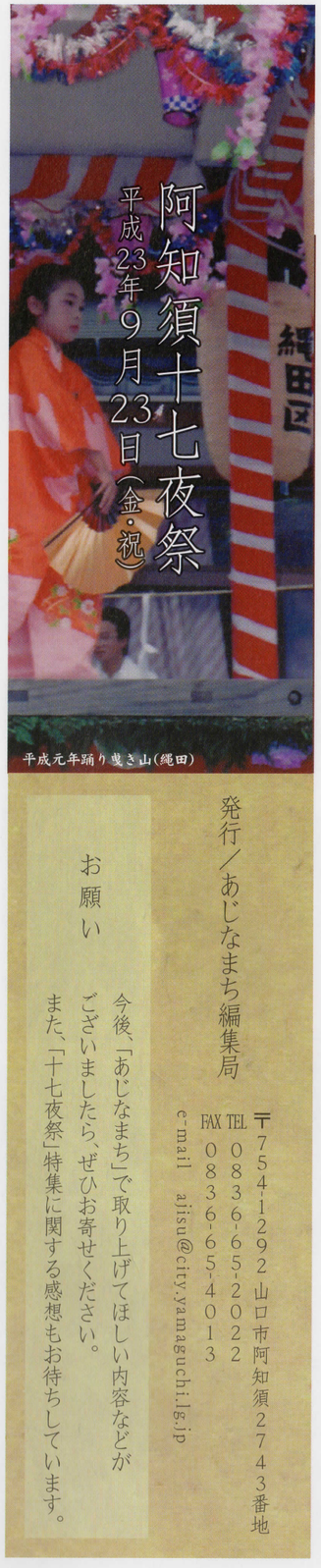
自然環境も大きく変化しました。唱歌「松原遠く消ゆるところ…」と歌うとき、これは阿知須の歌だと信じていた、あの白砂青松の遠浅の海は21世紀の今、広大な干拓地と変わりました。

その干拓地の丁度「へそ」の位置にあるのが「遠石島公園」です。遠石は、廻船の町阿知須を象徴する造船所であり、錨泊地（びょうはくち）でもありました。数十隻もの三本マストの大型帆船が、『十七夜』には揃って帰港していたのです。家の玄関に提灯を飾って祝ったそうです。

島が陸地になって、遠石島の御旅所には御管絃船が御神輿を迎えに行けなくなり、海の男達が豪快に御神輿を奪い合った海上での船競り合いも今は見られなくなりました。

「海をも拓（ひら）く先賢の教えはやがて我が力」と歌う阿知須中学校の校歌、昭和26年に制定されて以来60年、歌い続けて節目の今年、輝かしい未来を誓い合う国民体育大会を迎えます。希望の海へ向かって、大きく漕ぎ出した阿知須の先賢にならって、後に続く若人達が一段と雄飛するようみんなで応援いたしましょう。

自治会連合会の刊行による『阿知須のさきがけ』にも、当地全域で発揮された我が郷土の先輩達の努力と献身のことを紹介しています。そういう「さきがけ」を持つ幸せを常に思い浮かべながら、ふれ合いいっぱい、「心豊かな元気で住みよい阿知須」をご一緒に創っていきましょう。



阿知須十七夜祭

平成23年9月23日（金・祝）

平成元年踊り曳き山（縄田）

発行／あじなまち編集局

〒754-1292 山口市阿知須2743番地
TEL 0836-65-2022
FAX 0836-65-4013
e-mail ajisu@city.yamaguchi.lg.jp

お願い

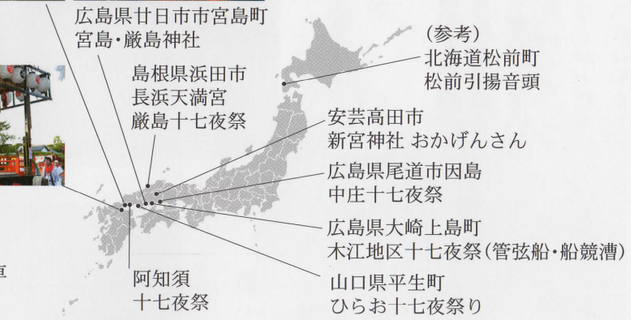
今後、「あじなまち」で取り上げてほしい内容などがございましたら、ぜひお寄せください。
また、「十七夜祭」特集に関する感想もお待ちしています。

他県の十七夜祭

宇部市丸尾
丸尾十七夜祭

広島県廿日市市宮島町
宮島・厳島神社

（参考）
大分県中津市
中津祇園
松前音頭＋山車



のこそう！阿知須の十七夜祭

石川 康恵（砂郷）

阿知須の十七夜祭に欠かせないのが「ヤマ」。「由来となった宮島の十七夜祭ではどんなヤマを曳くのだろう」と思い、調べてみました。

すると、宮島では「管絃船の祭り」でヤマは曳かないというのです。また宮島にならって十七夜祭を行うのは阿知須だけでなく、瀬戸内海沿岸を中心に多く残っていることもわかりました。しかし、どの「十七夜祭」も、「ヤマ」を曳くのは県内・県外ともにみつかりませんでした。阿知須の「ヤマ」は一体どこから来たのでしょうか。

調べると、大分県中津市で570年の歴史を持つ「中津祇園祭」が、阿知須によく似た形態であることがわかりました。中津祇園祭では、松前音頭を唄いながら各町内会の山車が街を練り歩きます。掛け声も「ヨーイトコ、ヨーイトコセ」と阿知須と同じです。山車の上で舞踊が披露される点もよく似ています。（中津祇園の映像はインターネットでみることができます）

大分と阿知須は昔から海を通じ交流があり、漁師同士が漁法を教えあったという話や、縄田の蛭子神社の御神体がもともと豊後の国（現大分県）から来たとの言い伝えなどが残っています。つまり、阿知須の十七夜祭は、漁師や船員たちが大分の祭りを伝えた背景があるのかもしれません。

阿知須浦の多くの船乗りたちは、いったん航海に出ると1ヶ月から3ヶ月は帰れなかったそうです。阿知須十七夜祭は航海安全と豊漁祈願のお祭りですが、普段さみしい想いをしている家族を思いっきり楽しませる特別な日だったに違いありません。船乗りたちが中心になって家族やまちの人たちを喜ばせようと知恵を絞った結果、御管絃船をだし「ヤマ」を曳くという他所にない「阿知須十七夜祭」を作り上げたのでしょう。

その船乗りたちの想いに馳せ、廻船業で栄えた阿知須の伝統「十七夜祭」をこれからもしっかり継承していきたいですね。

昭和30年５月（縄田）

想う

西中 正実
〈中村区〉

「十七夜祭」を盛り上げる「御幣（ごへい）」の飾り付けは、商店街筋に張り巡らされていました。商店や一般の家庭からも寄付があり、寄付を頂いた所にはお札を張っていました。商店街には出店が立ち並び、各家庭も親戚などを招いてご馳走を振舞い、お引きの品まで用意したので、商店街は大変活気がありました。大売出しも開かれ、福引では米一俵や酒などが当たり大賑わいでした。

また、阿知須の「十七夜祭」、井関の「北方八幡宮の秋祭り」は、お互いに招きあい交流がありました……。

昭和32年　中村地区から西条地区のとおり

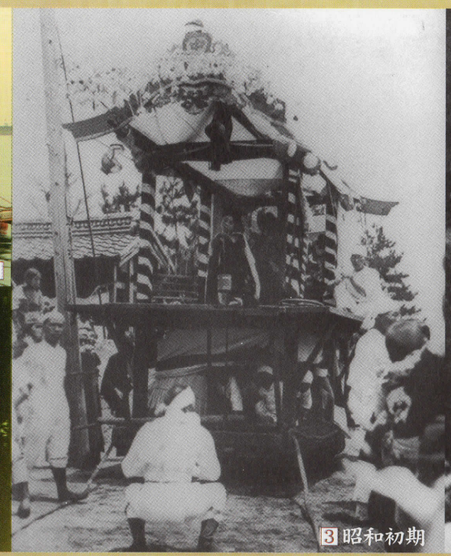
昭和32年 御管絃船（中村）

昭和55年 御管絃船と山車の御座船（縄田）

昭和29年 子ども樽みこし

4

4 昭和55年



3 昭和初期

2 昭和31年

1 昭和32年

十七夜祭 活気談義

工藤 昭三さん（東条）

昔は祭りが鮮やかでしたよ。露店が所狭しと連なって、人が溢（あふ）れかえっていたから、山車がやっと通れよった。阿知須の者にとっては、1年に1度の、本当に楽しい行事じゃった。 写真1

縄田 重光さん（西条）

普段は質素に生活をして、祭りの時だけは派手にやる。親戚を家に呼ぶのが慣習だったから、阿知須にはすごい人が集まってきよった。町内全体が祭りを楽しみよったね。今は毎日が祭りみたいな生活じゃからね。祭りが廃（すた）れるいね。 写真1

縄田 政信さん（小古郷）

十七夜祭は、海上安全と豊漁祈願の祭り。私は16歳から祭りに出たよ。御管絃船を引っ張って、自分の地区の浜まで漕ぎ着けたら勝ちじゃから、命がけじゃった。祭りは、飯より好きじゃった。 写真2

松浦 有朋さん（砂郷）

ロープで御管絃船を引っ張る、そのロープを海にもぐって切って、自分の地区へ引っ張り戻そうとするんよね！

浜では迎え提灯で、「こっちに着け！」と振る。その景色がとても美しかったね。 写真2

杉村 勲さん（小古郷）

20歳から参加しよるけど、昔はよぉ、けんかにもなりよった。それも楽しい思い出よ。

シャギリもね。昔は楽譜なんてないから、ぜんぶ耳で覚えよった。 写真3

香川 均さん（縄田）

昭和55年、縄田地区に30年伝承した山車は老朽化のため処分することになり、最後のお別れにドラム缶26本で御座船をつくり、会場をパレードしたことを昨日のことのように覚えています。 写真4

平成23年

今年の「十七夜祭」は、恵比須神社の建て替えを祝い、9月23日（金・祝）に本殿祭、御神幸祭、踊り曳き山が行われます。

阿知須の伝統を次世代につなげようと、2011年7月、今日まで十七夜祭を盛り上げて来られた6名の先輩にお集まりいただき、祭りへの想いをお聞きしました。

女神輿（メン）か？男神輿（オン）か？

この日は30度を超える猛暑日。阿知須地域交流センターの一室では、かつての祭りの活気談義に花が咲き、ついには2基ある御神輿のうち、御管絃船に乗せるのは「メン（女）か？オン（男）か？」という議論が飛び出しました。

オン派

けんかが好きなのは昔から男！
暴れ神輿が御管絃船に乗るので、あれはオン！

VS

メン派

けんかが好きで、暴れるのは女じゃから、あれはメン！
一年間の女性の労をねぎらい、たまには船に乗ってゆっくり遊覧しておいで！
という意味だから、あれはメン！

そこで、十七夜祭の由来となる厳島神社に真偽を仰ぐと、「厳島神社の神輿はひとつで、男でも女でもない」ということが判明。メンやオンと称すのは、阿知須浦ならではと分かり、一同驚嘆しました。さて、皆さんは「メンか？オンか？」どうお考えになりますか？

昭和31年

次世代につなげる

どうすれば祭りの活気を今に甦らせることができるか。

暮らしを取り巻く環境が様変わりした今だからこそ、「十七夜祭のスタイルを時代に合わせていくことも大事」という意見もいただきました。

祭りは下火になったけれど、子どもたちはシャギリと踊りの練習に進んで参加し、若い親御さんは子どもに地域の文化を体験させたいという想いを感じると、先輩方は言われます。「絶対にこの祭りは止められん」と、十七夜祭の活気談義は延々と続きました。

阿知須恵比須神社「十七夜祭」全図

起源

明治11年頃（1878年）、宮内通船住重丸の中村民之助氏と甥の中野金兵衛氏が安芸の宮島の厳島神社から神霊を勧請し、その宮島社に伝わる管絃祭にならい、旧暦6月17日に御管絃船を出し神事を行うようになったのが「十七夜祭」の始まりと言われています。

日程

・前日　前夜祭（夕日）【神事】
　　踊り曳き山【恵比須神社でお祓い】
・当日　踊り曳き山運行
　　本殿祭【神事】
　　御神幸祭【御神輿の宮出し→御旅所まで行幸→御管絃船乗船（海上渡御）→下船→本社まで行幸→宮入り】

祭りは、前日に前夜祭（夕日）、当日に本殿祭と御神幸祭（御神輿巡幸）が行われ、踊り曳き山の余興でにぎわいます。御神幸は、恵比須神社奉賛会氏子からの奉仕者が神役を務め、御神輿や御管絃船は、前年に山車を出した五地区が交代制で担当しています。

御神幸祭「御神輿」

御神輿

恵比須神社の神さま（神霊・御霊（みたま））が、本殿から御旅所へ渡御する御神幸に使われます。氏子に担がれて町内を練り歩きますが、それは神さまに町内を見ていただくためと言われています。

御神幸祭「御管絃船（おかげんせん）」

御管絃船

町内を御神幸した御神輿を御旅所から恵比須神社に戻す際、御神輿を船に乗せシャギリや松前音頭などでにぎやかに航行します。御神輿を載せた親船を小船が曳きます。昔は自分の地区の住民が待つ砂浜へ、船に乗せられた御神輿をお連れしようと、各地区の小船が運航技術の腕比べをしたそうです。ちょうちんで飾られた船が列をなして海を進む姿は陸から見ても幻想的です。

掛け声

恵比須神社は昔からエンヤエンヤという掛け声が主流です。これは、「十七夜祭」の御管絃船の曳船の漕ぎ手の掛け声「ホーランエイヤ〝ヨヤサノサッサ、ホーランドッコイ、ヨトマカヨイイ　ホーランエイヤ〟ヨヤサノサッサ」のエイヤから来た掛け声ではないかと言われています。「ホーランエイヤ、ヨトマカヨイヨイ」は船乗りが帆船の重い帆をマストに巻き上げる時の掛け声です。「ヨトマカヨイヨイ（ヨイトマケ）」は、〝力を入れて巻き上げよ〟がなまった掛声です。

「踊り曳（ひ）き山」

踊り曳き山

2階部分は要所で披露される舞踊の舞台となります。移動の際には音頭取りが左右に2人配置され、右側（面舵側）は緑の房、左側（取舵側）は赤い房を持って、踊り曳き山の進行を指示します。これは船舶が航行する舷灯を意味するもので、山車全体を船に見立てています。

1階部分はシャギリと呼ばれるお囃子がのり、笛や太鼓で祭りを盛り上げます。山車は太い綱で山車を曳く「曳き手」によって進行しますが、山車の車輪は前後にしか動かないため、右左折の祭は棒を用いてこの原理で方向を変えます。この時の勇壮な動きが山車の見所の一つです。以前は男性だけでしたが、最近は女性も「曳き手」として祭りに参加するようになりました。

継承

当時、恵比須神社の氏子であった砂郷、西条、中村、縄田、東条、小古郷の六地区が地区ごとに余興として踊り曳き山を出しています。1ヶ月以上の練習を経て、舞踊、地踊り、芝居、仮装行列など芸能を競い合うお祭りに発展しました。通行上の争論が起きることも珍しくなく、威勢のいい男たちの喧嘩も勃発しお祭り気分を一層高めました。この祭事は、明治45年まで続きましたが、大正初年の不況時代に、6地区が毎年交代制で踊り曳き山を担当し、現在は5地区の形になりました。

（注）中村区では、昭和49年の踊り曳き山、翌年の御管絃船への参加を最後に十七夜祭への参加を辞退している。

御神幸祭「御神輿」

御神輿

恵比須神社の神さま（神霊・御霊）が、本殿から御旅所へ渡御する御神幸に使われます。氏子に担がれて町内を練り歩きますが、それは神さまに町内を見ていただくためと言われています。

渡御中に御神輿を上下左右に振り動かして荒々しく扱うのは、「神輿振り」と言われ、御神輿に御座されている神さまの「魂振り（たまふり）」により、神さまの霊威を高め、豊作や豊漁、疫病が退散するとされています。また、海などに御神輿を担ぎいれるのは、一種の禊（みそぎ）神事と考えられています。御神輿が巡幸するのは神社で神さまの分霊を移し、隈なく渡御することにより、氏子がご加護をいただくためと言われています。

運行

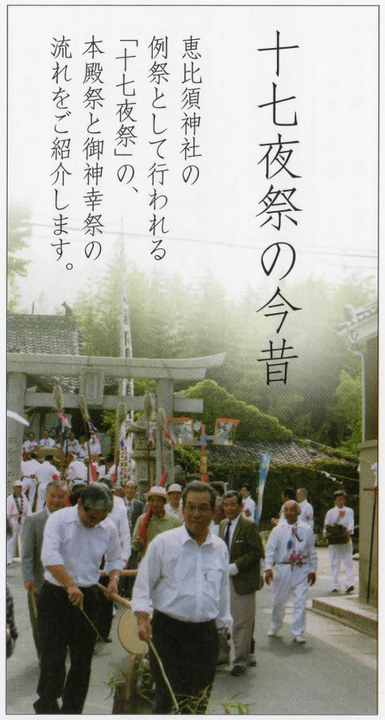
古老によれば、恵比須神社の御神輿は女神輿（メン）と男神輿（オン）の2基が御旅所に渡御します。新しい御神輿は中老が担ぎ静々と御旅所まで進みますが、古い御神輿はいわゆる暴れ御神輿で、荒々しく上下左右に揺らし、暴れまくりながら御旅所まで進みます。お祓い後、御神輿を親船に乗せます。

なお、御神輿の前には次に記載の神役が先導します。

- ①先払い　1名　前方の通行人を追い、御神幸がすみやかに行われるようにする役
- ②潮たご　2名　満潮の海水を汲み、潮桶に竹笹を浸し道中の人々を清める役
- ③太鼓　2名　胴長の宮太鼓の中心をつるし天秤棒でかつぎゆっくり打つ役
- ④鉄砲　5名　鉄砲伝来以来、神事に加わった御神幸の安全を祈る役
- ⑤弓矢（弓箭）5名　弓矢は武器、兵器であり鉄砲に同じく、御神幸の安全を祈る役
- ⑥熊毛（毛槍）5名　さやを熊の毛で飾った槍で、これも御神幸の安全を祈る役

十七夜祭の今昔

恵比須神社の
例祭として行われる
「十七夜祭」の、
本殿祭と御神幸祭の
流れをご紹介します。



本殿祭

午前10時から恵比須神社（以下、本社）で、宮司や恵比須神社奉賛会役員が一同に会し執り行なわれます。

御神幸祭

1 15時（昔は14時）からの神事（発れん）

恵比須神社の神霊が2基の御神輿に移られます。

2 本社から御旅所へ、御神輿が渡御

渡御行列は伝統に習い、神役・2基の御神輿・宮司の順に行幸されます。

3 御旅所での神事

御旅所は、神社や祭神にまつわる場所や氏子、地域にとって重要な場所が選ばれていたようです。ここでは、地域産業の繁栄・振興並びに、氏子の無病息災、幸せを願って神事が行われます。今では、御神輿の担ぎ手担当地区の選定で、東条公民館南側広場か阿知須漁港が御旅所となっています。

御旅所の変遷は次のとおりです。

遠石島
←
中村民郎氏の門庭
←
小古郷蛭子神社
←
東条公民館南側広場
阿知須漁港広場

4 御旅所の神事後

1基は御管絃船の親船に乗船。もう1基は本社に還幸されます。近年、御神輿を親船に乗せるのは阿知須漁港が通例になり、岸壁に横付けの親船も潮位により高低差が異なることから、安全に御神輿を乗せるにも苦労が絶えませんでした。そこで、担ぎ手の安全を考え、クレーン車を活用する光景も多く見られるようになりました。

5 御管絃船の運航開始

御管絃船は夕暮れから、提燈で飾り付けた小船（漁船）が親船を守るように、漁港内を運行します。親船には宮司、御神輿、担ぎ手、シャギリの子どもたちなどが大勢乗船するため、かなり大きな船を必要とすることから、砂運搬船が使われていたようです。

しかし、近年はこのような船を調達することが出来なくなり、運送会社の運搬船を借りる等、苦労が絶えないようです。

6 親船から御神輿を下船後、神事（お祓い）

御神輿を下船させると、お祓いを受け本社に向かいます。

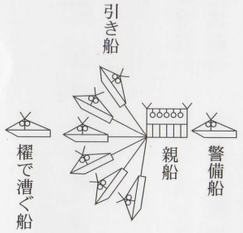
7 御神輿の還幸

本社に戻ると御神輿から神霊を社殿に移す神事（還幸）が行われ、すべての祭礼が終了します。

古老のお話によると、親船を各地区（6地区）の伝馬船で引き寄せ、自分の地区の皆が待ち構えている浜までお連れしようと、櫂（かい）を必死に漕いでいたようです。ここでは、親船と伝馬船とを繋ぐ他地区のロープを切るなど、小競り合いが常であり、郷土愛や阿知須の若者衆の心意気をアピールする場でもあったのでしょう。

中でも、小古郷地区の伝馬船に取り付けられた櫂は特別多く、左右6丁ずつの12丁で、1丁を2人で漕ぎ、さらに艫（ともろ）櫓も取り付けていたことから相当の馬力があり、小古郷地区の勝利は常に確定していたようです。つまり、この小競り合いは、勝敗が当初から決していたことへのささやかな抵抗でもあったのかも知れません。

しかし、小古郷地区は勝利の美酒を味わうことなく、区民の激励を受け、再び親船から御神輿の下船場所まで他地区の伝馬船と移動したそうです。



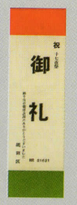
十七夜祭Q&A

Q 恵比須神社は、どんな神様が祀ってあるのですか？

A 阿知須町史によると、恵比須神社の祭神は、蛭子命（ひるのみこと）と三女神といわれています。蛭子神とは海の神様、三女神とは広島の厳島大明神（厳島神社の尊称）で、富貴をもたらす神様と言われています。

Q お花をつなぐとはどういうことですか？

A お花とは、お祝いやお供えとして出される金品のことをさします。このお祝い・お供えを集めることを「花をつなぐ」といいます。阿知須では山車の担当地区がお花を集めて祭りの運営費としていました。現在では、担当地区が各家庭を回り、お花を集めることはありませんが、今なお、各家庭や商店などでは担当地区やシャギリ、踊り子へお花をおくる風習が残っています。十七夜祭は、地域の方々のご理解とご協力で支えられています。



当時、お花をいただいたお宅の玄関に貼られた札

縄田地区昭和59年の寄付芳名帳。この時は2,285,500円も集まっています。

Q はちまきはなぜ緑と赤なのですか？

A 船舶は夜間進行方向をほかの船に知らせるため、両側に色のついた灯りをつけることが決まっています。この時、右側に緑灯、左側に紅灯（赤色）をつけます。はちまきの色も、この舷灯にならっているものと考えられます。

Q 十七夜祭でよく唄われる「松前音頭」の松前ってどこにあるのですか？

A 松前音頭の元祖は「北海道松前町」です。江戸時代末期、ニシン漁で栄えた松前の漁師や船乗りたちが作業唄として唄い、全国に広がりました。山車で指揮を執る音頭取りが船の舷灯にならい、紅（赤）の房・緑（青）の房を持つように、山車全体が船に見立てられているので、山車の上でも「松前音頭」を唄うわけです。

Q 祭りが終わったら、踊り曳き山はどこに保管されているのですか？

A 山車の本体は、飾りと車輪、車軸をはずして、東条公民館に併設されている倉庫に保管されています。車輪と車軸は、乾燥によるひび割れを防ぐために、翌年の祭りまで、井関川河口か阿知須漁港の干潟の海底を深く掘り、埋められています。